

失われた 祖国

OBASAN

ジョイ・コガワ著◎長岡沙里訳



OBASAN by Joy Kogawa

Copyright © 1981 by Joy Kogawa

Japanese translation published by arrangement with
Marian Dingman Hebb through The English Agency (Japan) Ltd.
Japanese paperback edition © 1998 by Chuokoron-Sha, Inc.



中公文庫

うしな ^{そ こと}
失われた祖国

定価はカバーに表示してあります。

1998年7月3日印刷

1998年7月18日発行

著 者 ジョイ・コガワ

訳 者 ^{ながおか さ り}
長岡沙里

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA, INC. / Sari Nagaoka

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203193-1 C1197

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

失われた祖国

ジョイ・コガワ

長岡沙里訳

中央公論社

目次

第一部 屋根裏で見つけた小包み 9

第二部 エミリーおばさんの日記帳 95

第三部 長崎から届いた手紙 341

資料 456

訳者あとがき 461

解説

猿谷 要 467

この小説は歴史上の出来事にもとづいて書かれており、何名かの人物に実名が使われている以外、登場人物の大部分は架空である。

エド・北川、グレース・タッカー、ジョン・鈴木、ゴードン・中山のみなさんに対して、また、カナダ国立公文書館がミュリエル・北川、グレース・タッカー、T・バック・鈴木、およびゴードン・中山のファイル中の書類および手紙類の使用を許可してくださったことに対して、ここで心から感謝申しあげたい。

この本をわが母と父、そしてあのすばらしい人々、日系一世のみなさんに捧げたいと思う——いまでも元気でおられる方々にも、すでに亡くなられた方々にも。

ジョイ・コガワ

勝利を得る者には、

隠されているマナを与えよう。

また、白い石を与えよう。

この石の上には、

これを受ける者のほかだれも知らない新しい名が書いてある。

『ヨハネの黙示録』

第二章十七節

語ることでできない沈黙がある。

語ろうとしない沈黙がある。

草の下、物語は夢み、夢の下に感覚の海は横たわる。みずからを解き放つ言葉は、羊膜の深みから湧きいずる。言葉は私に語りかける。それを聴くということは、声なき声を抱き止めることなのだ。だが、私にはできない。その言葉は石なのだから。

認めよう。

私は静寂を憎んでいる。石を憎んでいる。冷たいアイコンを納めて固く閉ざされた地下室を憎んでいる。そして夜を凝視することを憎んでいる。疑問はやせ細り、宇宙のかなたへと消えうせてしまう。空がこだまを飲みこんでしまう。

石がはじけて物語が飛び散ることがなければ、種子が話術の花を咲かせることがなければ、私の人生に生きた言葉はない。私の聞く音はただのもの音にすぎぬ。白い音。落下する言葉は地を穿つあばた。地下の流れをたどる霰の粒。

もしもその流れを下り、隠された声を追い求めていったなら、いつか私は、みずからを解き放つ言葉に出会えるだろうか？ 夜空に向かって尋ねてみるけれど、沈黙は微動だにしない。私の問いに、答えはない。

失われた祖国

第一部

屋根裏で見つけた小包み

1

一九七二年八月九日 午後九時五分

谷間^{クラッ}はいま静まりかえり、マツチ棒に火をつけても炎はゆらりともしないだろうと思われた。背の高い草が先端を左右に垂らして身じろぎもせず立っている。宵やみせまる空には星々がきらめき、新月だけがかすかに動いている。

私たち——おじさんと私は、毎年今ごろになるとここへやってくる。その場所はバーカ―農場から半マイル、一九五一年にみんなで引越したグラントンの村からは七マイルのところにあった。

「なんにも変わってないね」

坂道を歩きながら私は言った。

「ウミ ノ ヨウ。海のようにだね」

おじさんも草原を指さしながら言う。

彼が手をさしのべると、まるで合図に答えるかのように、丘の表面が突然のそよ風に揺

らいだ。草の影がさざ波となって次から次へとリズムカルに移動していく。乾いた波をかき分けながら進むと、草の葉がスプレーのようにぱらぱらと体にふりかかってくる。おじさんは歩きはじめたばかりの赤ん坊のように、大きく両脚を広げてひよこひよこ歩いている。そしてバランスを失いかけると、綱渡り師のようにひよいと手をつき出すのだった。

「目まいがしたの？」

よろけて片足立ちになったおじさんの体をささえてあげながら私は尋ねてみた。彼の唇からは、息を吸いこむたびに小さな音が漏れる。

「もう年だからね」

おじさんはそう言って、また後ろによろめく。

坂の頂上に着くと、地面にへこんだ部分があった。いつもひと休みするところである。おじさんは、野生のサボテンなどが生えていないかあたりを見まわし、それからゆっくりそこに腰をおろした。根っこみたいな指が草むらを押しつぶしている。

見おろすと、曲がりくねった河床には濁った水が流れていた。星明かりのなかにおじさんはうずくまり、私は草を口にくわえて立つ。おじさんはもうこれ以上、海に近づくことができないのだ。

「ウミ ノ ヨウ」

おじさんのいつもの口ぐせだった。

眼前に広がる世界はいわば処女地である。バージンランド歴史始まってこのかた、この大草原の草は

まだ一度も刈り取られたことがない。一マイルほど東に行くと高くきり立った崖があるが、そこはかつてインディアンたちが野牛バッファローを追いたて、つき落として死に追いやった場所だという。野牛の骨は今もそこに残っていて、地すべりを起こした斜面からつき出していたりする。

地面にしゃがみこんだおじさんもまるでインディアンの首長のようだ。インディアンと同じ草原焼けした肌をもち、頬に刻まれた深く茶色いしわは、乾あがった河床の亀裂にそっくり。これであと頭に羽根飾りでもつけければ、立派な「カナダ大草原に住むインディアンの首長」ができあがる——アルバータ土産、メイド・イン・ジャパンの絵ハガキにはぴったりではないか。

長年、私が教えてきたクラスのインディアンの子供たちのなかには、日本人と言っても通るような子がいるし、またその逆の子もいる。彼らの黒い眸ひとみの奥の動物じみた内気さには何かがあるような気がしてならない。その目のそらしかたの素早いこと。思い出せば私がまだ幼かったスローカン時代、周囲の友だちの目もやはり、それと似た猫のしっぽのようなビクビクした動きかたをしていたような気がする。

おじさんと私が初めてここへ散歩にきたのは、今から十八年前、一九五四年八月のことだった。エミリーおばさんがはじめてグラントンを訪れてから二カ月後のことである。彼女が帰って何週間かたつと、おじさんはひどくつらそうなようすであちこち歩きまわり、後頭部を手で叩いたりしはじめた。そんなある夕べ、私たちはここへやってきたのである。それはちょうどきょうのように静かなたそがれどきだった。草の波をかき分けて歩いていくうち、彼の興奮はおさまってきたかのようにみえた。だがその目はまだあたりに、そしてときどきは私に鋭く注がれていた。

丘のはずれまできて、二人で立ち止まって谷底を見おろすと、木立ちや雑木林を縫って川が流れていた。がらがら蛇が出そうな気がして私は怖くなり、道路のほうへ戻りたくなかった。

「ここ、あぶなくない？」

私はおじさんに尋ねた。

でもおじさんは、人の質問にめったにはっきりとは答えない人だ。突然、「モウ イクツ？ いくつになったの？」と訊いたので、子供のように怖がっている私を、彼はたしなめているにちがいないと思った。

「十八よ」と私は答えた。

おじさんは足をひきずるようにして歩きながら首を横にふった。あまり深くため息をついたので、ふたたび吸いこんだ息はうなり声になった。

「おじさん、それがどうしたの？」

彼は身をかがめ、ゆっくりと首をふりながら草を手で叩いた。そしてやさしく、「若すぎるよ。まだおまえは若すぎる」とつぶやいた。それからなかば悲しそうな、なかば上品な微笑を浮かべながら、幼児か赤ん坊でもあやすように、「またいつかね」と言ったのだった。

そのとき「いつか」教えてくれると言ったことを、おじさんはいまもって教えてくれない。彼は私の年を知っているのかしら、とときどき不思議に思うことがある。私はもう三十六歳。とうてい子供とはいえない年齢なのだが。

草原の冷気をあびながらおじさんのそばに坐ると、私は彼といっしょに草の森のなかに隠れてしまう。自分の手を彼の手のそばに、もつれあった草の根が乾いた固い土を覆っている上に置く。

「ねえ、おじさん、どうして私たち、毎年ここへくるの？」

私は小声で訊いてみる。だが答えはない。私はおじさんやおばさんから学んできた。動物たちが嵐を避けようとするように、言葉も身を隠すことがあるのだと。

もじゃもじゃの草の根っこに、私は指をくぐらせてみる。すると私の指は根っこになり、関節から草が生えているように見える。

私はこの小さな森の一部。草になって、この大地と、この空をくまなく捜すのだ。あるかすかな、しかし執拗な渴きにうながされて。

「ねえ、おじさん、なぜなの？」

何か言おうとしているのだろう、彼は口を開け、目を大きく見開いて前方をみつめる。だが、すぐまたその考えをうち消すかのように、乱暴に手で顔をこすって首を横にふるのだった。

今、私たちのまわりには、とてつもなく広々とした空がある。樹木や家や、その他いかなる人工的なものの影によっても遮られていない草原の上にかかる巨大な空が。南アルバータに長いあいだ住んでいながら、私はまだ一度もそれをゆっくり眺めたことがなかった。私たちが今こうして、無限の闇のなかに永久に坐っているあいだにも、高く生い茂った草原の草たちはかすかな月光を求めてわずかに身をたわめ、成長しつづけているような気がする。

ようやく、私はおじさんの腕に触れ、「ちよつと待っててね」と言って立ち上がった。それから丘のはずれまで歩いていった。いつも最低一本は花を摘んでから家へ帰ることに